



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	共生社会の基盤となるキャンパス・コミュニティ
Author(s)	山田, あすか//講演; 小篠, 隆生//聞き手; 菅原, 修孝//司会
Description	北海道大学ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言制定記念講演会 第2回記念講演 : 大学とユニバーサルキャンパスデザイン. 2021年12月16日, オンライン
Relation	(2022). 北海道大学ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言制定記念講演会記録集 北海道大学ダイバーシティ・インクルージョン推進本部
Issue Date	2022-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/85722
Type	lecture
File Information	02Yamada.pdf



北海道大学ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言 制定記念講演会

第2回記念講演：大学とユニバーサル キャンパスデザイン

共生社会の基盤となるキャンパス・コミュニティ

日 時 2021年12月16日（木）18:30-20:00

開催方法 オンライン

講演者 山田あすか（やまだ あすか）氏

東京電機大学未来科学部建築学科教授。専門は医療・福祉等分野の建築計画、環境行動で、建築による生活者の支援を研究。主な賞に、日本建築学会奨励賞、日本建築学会学会賞（2018）『医療・福祉施設における利用者本位の建築計画に関する一連の研究－環境行動、施設計画、制度と都市環境のスケールを縦断して』、関東教育協会業績賞、キッズデザイン賞等。

聞き手 小篠隆生（おざさ たかお）氏

北海道大学大学院工学研究院准教授。専門は、キャンパス計画、都市計画、都市デザイン、建築計画。主な著作に、『「地区の家」と「屋根のある広場」』（2018、鹿島出版会）：2021年日本建築学会著作賞、「まちのようにキャンパスをつくり、キャンパスのようにまちをつかう」（2020）など。主な作品に、東川町立東川小学校＋地域交流センター（公共建築賞優秀賞2020）など。サステイナブルキャンパス推進協議会 CAS-Net JAPAN 副代表幹事。

司会 菅原修孝（すがわらのぶよし）氏

北海道大学理事



山田あすか 東京電機大学未来科学部
建築学科教授



小篠隆生北海道大学大学院
工学研究院准教授



菅原修孝
北海道大学理事

菅原 皆さんこんばんは。ただ今より「北海道大学ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言制定記念講演会」の第2回を開催いたします。司会を務めます北海道大学理事の菅原です。どうぞよろしくお願いいたします。

「北海道大学ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言」は、世界の課題解決に貢献する大学として不可欠な多様性と包摂の理念について、北海道大学学内構成員の理解を促進し、国際社会に向けて本学の決意を発信することを目的に、去る12月1日に制定されたものです。

宣言制定記念として、4回の記念講演会を企画し、本日は12月10日の第1回「大学と民族」に続く第2回目となります。

本日の記念講演会のテーマは「大学とユニバーサルキャンパスデザイン」です。まず東京電機大学未来科学部建築学科教授山田あすか様より、「共生社会の基盤となるキャンパス・コミュニティ」のご講演を賜り、その後、北海道大学大学院工学研究院准教授小篠隆生様に加わっていただき、山田先生、小篠先生による対談をお願いしてございます。最後に皆様からいただきました質問にお答えする時間を設け、午後8時ごろ終了を予定しております。

山田あすか先生のご紹介ですが、ご専門は医療福祉等の分野の建築計画、環境行動です。主な受賞に日本建築学会奨励賞、日本建築学会学会賞などがございます。

次に小篠隆生先生のご紹介ですが、ご専門はキャンパス計画、都市計画、都市デザイン、建築計画などです。主な作品に北海道の東川町立東川小学校地

域交流センターがございまして、これは2020年公共建築優秀賞を受賞されております。

それでは山田あすか先生によるご講演を始めたいと思います。山田先生よろしくお願いいたします。

山田 東京電機大学の山田と申します。本日このような貴重な機会をいただき大変感謝しております。北海道大学の小篠先生とは研究で一緒させていただき、そうしたご縁により本日の機会をいただいたと思っております。いろいろな関わりが次の関わりや様々な機会に繋がっていくと実感しております。本日は「共生社会の基盤となるキャンパス・コミュニティ」というテーマでお話します。

先ほどご紹介をいただきました、私の専門は医療、福祉、教育や居住に関わる分野での建築計画と環境行動です。建築計画という分野は、建物がどう作られていると皆さんにとって居心地が良かったり、安心できたり、安全であったり、あるいは効率よく運用することができるかを研究する分野です。環境行動という分野は、物理的な環境や社会的な環境、広い意味での環境の中での人々の振る舞いそのものを研究していく分野です。

私たちが研究している建築計画という分野では、そもそもなぜ建築を作るのかや、出来上がったものをどう作っていくのかという時間のフェーズがいろいろな部分で考えていかなければいけないと大きく変化をしているところです。また計画対象のスケールとしても、家具などの小さなものから人々が実際に使う空間、それらの空間群がどのように作られていくか、例えば今日の話のキャンパスとかその外に広がっている街と

いったところとの関係がより重視されていると説明することができます。

これらの中で私は、環境行動という視点で人々の行動や認知の特性から居場所はどうか、空間構成はどうか、建物と社会との接点である制度がどう作り変えられていくと社会ニーズに合った建物のあり方、環境のあり方を実現できるか、都市環境資源という意味で建物や建物群、それらの関係性はどのように計画することができるか、今あるものをどのように生かしていくことができるか、という視点で研究をしています。

そうした中で具体的にどんな研究しているかをご紹介します。多岐に渡りますが、私の研究の主な視点は街中の居場所であるとか、生活や医療介護の空間がどのように作られるといいか、といったことにあります。ぱっと見ておわかりいただけます通り、本日「ユニバーサルデザインのためのキャンパス」というお話をいただいておりますが、必ずしもそれを直接かつ専門的に勉強しているわけではないとご理解いただけるかと思えます。

さまざまな視点が入り混じり、キャンパスのことを考える、そのキャンパスの背景にある社会のことを考える、と広げていくとき、福祉のこと、地域資源としてのキャンパスのあり方、ラーニングコモンズも含めた、自由に使えるオープンな場所、人々がコミュニティをもって活動ができる『コモンズ』と呼ばれる場所、その場所は具体的に建築としてどうあるべきかといった建物のこと、こうした様々なキーワードがお互いに関係しながら発展をしていると説明ができます。

これらを踏まえた私の立ち位置は、キャンパスデザインの専門家ではありません。対談させていただきまず小篠先生はキャンパスデザインがご専門です。私をお呼びいただきました理由が、まさに私自身がキャンパス計画を研究対象にしていないことに思っています。それは、今から新しく作られるキャンパスの姿を考えようという時は、今とは違うもの、まだないものを考えなければならないからです。今主流でないものが、次を作っていくという発想です。

生物学の観点ではそうしたことをこんな言葉で表現されてる方がいらっしゃいます。「はずれ者が進化をつくる（稲垣栄洋）」。今主流であるものがどのように

次のものにとって代わられていくか、あるいは付与されていくか、そうした観点がこれからの大学キャンパスあるいは社会を考えていく上で必要だということです。そうした観点から、私自身はキャンパスの専門家ではないけれど、お互いに議論が発展できる材料ということで、本日のお話をさせていただきたいと思いません。

一番最初の話が「ユニバーサルデザインからはじめる」という話題です。デザインという言葉が含まれておりますが、皆様ご存知の通り、あらゆるデザインというものはアンコンシャスバイアスを含む思想のかたまりだと言うことができます。

とてもよく見る光景です。トイレのピクトグラムや男女別のカラーリング、こうしたマークがありますので人にとって分かり易い、どちらが女性用か男性用か分かり易いと言われます。皆さんにも便利に使っていただいているようで、多目的トイレが黄色や緑で、それを真ん中に挟んで、赤い女性用のトイレ、青でカラーリングされた男性用のトイレ、よく見る光景です。どこでも、どのような公共の場でも見られる光景です。

ここで、はたと気付くことがあります。それはこの男性を示しているマークについてです。こちらはJISピクトグラムの「人間」を意味するマークと同じです。「基本の人間」は「男性」であるという思想を表しているピクトグラムです。男性は無徴、特徴を付与されていません。逆に「女性」はその思想における「基本の人間」ではないので、有徴化されています。つまり、異なるものとして特徴を付与、強調されています。ピクトグラムですと例えば女性装とされている服装、『女性らしい』とされている足を閉じて立つ姿勢、くびれという身体の特徴、こうした身体形状と装いで女性らしさが有徴化されています。JISのピクトグラムで示されているのはこの黒いピクトグラムまでですが、先ほどのような公共の空間で使われているサインでは、さらに赤という色を付与されて特徴が強調されています。ちなみに黒と青はほとんど同じ意味に使われています。

言葉にもこうした思想が表れているもの、これは女性表示語と言われますが、たくさんあります。女医さん、女言葉、女子アナ、女優、女性教員、女流〇〇、たくさんあります。こうした無意識のメッセージを女性はいつも受け取っています。基本の人間は男性であっ

て、この職業は基本的に男性のものであって、あなた方はこの社会が前提とする基本の人間ではない、というメッセージです。

こうした指摘が最近では強調される、注目されるようになってきました。こちらは広井良典先生の著書にある文章です。

『「近代」という時代においては、経済ないし生産活動がそれまでの時代に比べて飛躍的に大きくなり、個人の自由な経済活動が重視される中で、良くも悪くも“壮年男性”、つまり心身ともに健康で、個人としての独立度が高く、「自我」の意識や「意思」、「判断能力」もきわめて強固な存在が、社会の中心的なモデルとされた。』

実際にそうした思想が形になっていることを、私たちは日々のメッセージで確認することができます。このような強固な“「できる」人”が当たり前で、“「できない」人”や、“「できないことがある」人”が特殊だとされていました。それが、障害の個人モデルという考え方に結び付いてきたわけです。障害の個人モデルの考え方では、誰々が何々が“できない”状態を指して障害があると言います。障害の原因は個人にあるという考え方です。一方の障害の社会モデルでは、障害は人と社会環境の間に存在するもので、人の身体的な特徴や認知の特徴、その他人間がどう行動したい、こう世界を感じるというものと社会のあり方や社会環境のあり方にミスマッチがある時に、それを障害という説明します。この発想の転換がユニバーサルデザインを考えていくとき、重要になると考えられます。

私たちは日々サインにおける基本の人間は男性であるというメッセージを受け取っています。この有徴と無徴をひっくり返してみますと、こんな風にデザインすることができます。身体形状が中性化された人間というものがあって、男性を有徴化していきます。もしこの身体形状は中性化された人間は女性のことであって、肩幅とかネクタイの装い、しばしば男性装とされる装い、こうしたもので有徴化されているのが男性、基本は人間であって特徴のあるものを指して男性と呼んでいきましょう、そう受け取っている社会だったら、今では随分違う見え方をしていると思います。このようにデザインはアンコンシャスバイアスのかたまりでも

あります。

思想はデザインを作ります。女性を強調するピクトグラムにも理由があります。女性トイレもありますと示さなければならなかったという理由です。男性が基本的に外に出て仕事をしたり活動することが前提で、「女性用」のトイレが外にない時代もありました。共用のトイレしかない時代もありました。その時に男女別々のものを改めて作ろうとか、女性用のトイレもあることを、思想として示さなければならなかった。その時代に必要とされていたのは、有徴化された女性のピクトグラムであり、その存在への気づきでした。他にもたくさん、思想がデザイン化されたケースがあります。例えば電車での7人掛けのデザインとか、簡単に開かないような蓋、ねじ、様々なものです。それは安全のためであったり、こうすると使いやすいことを示すメッセージとして、あるいはこうすると快適に過ごせますというメッセージが形になったものです。

さて、思想がデザインとなるところは当然としても、デザインが思想を作っていく部分も大いにあります。

この、デザインは思想を作っていくとき、例えば男性と女性に固定的な色があって、女性は有徴化されたもので、基本の人間と女性は全く別のものであるというメッセージが刷り込まれていくと、それはそれで問題が起きます。そのデザインができた時には、それは必要があって、理由があったデザインでした。それがだんだん変わってきているところもあります。日本ではどこまでも赤と青のカラーリングが女性と男性の別を示すという強固なイメージが既に定着しています。良いこともあるけれど、難しいところもあります。

例えば“ランドセル”で画像検索をしますと、男の子は黒と青、女の子はピンクとか赤がまだ多数ヒットします。、こういう“らしき”の刷り込みとか、好みで選んでいるという考え方もありますが、当然それを好むだろうという押しつけになっている部分も中にはあります。そうしたことに息苦しさをを感じる人もいます。あるいは息苦しいとまでは思わないけれど、刷り込まれていることにある日気づいて、自分らしさって何だろうと考えてしまう。そんなことも存在します。

色による性別の分け、ジェンダーカラーは、決して社会標準とか世界標準ではなく、外を見てみれば固定的ではないことも皆さんご存知だと思います。パリの

シャルル・ド・ゴール空港、シンガポールのお手洗い、ニューヨークのジョン・F・ケネディ空港、男女の“色”は同じです。こちらはインドネシア、両方とも赤です。こちらはフィレンツェです。このように“色”は男性と女性で分けようと決まっているわけではありません。それぞれの社会においてそれが必要だと思うので作られているデザインに過ぎないということです。

こちらヘルシンキのレストランです。マークが付いてないブースは男性と女性の共用のお手洗い、女性マークが付いているブースが女性専用のお手洗いです。このトイレでは、ブースより前のスペースは、男性女性と分かれています。ここまで入ってきて自分が使いたいところをどうぞという仕組みになっています。手洗いのところで男性と女性が混ざりあう、こういうお手洗いが当たり前の環境で過ごしていれば、そんなもんだなとしか思わなくなっていくと思います。刷り込みは本当に怖いもので、男性と女性の色分けが当たり前かを、外に出てあるいは違う文化で体験してみると分かる場所があります。

自分自身の「当たり前」を疑うということは大切です。ユニバーサルデザインを考えていくとき、様々な「当たり前」がある、「当たり前」って一つじゃない、ということに気付くことが第一歩なのかなと思っています。

ここまでの話を少しまとめます。デザインというのはアンコンシャスバイアスを含む思想のかたまりです。今日は今の私の立場で思うところ考えるところを話しているんですが、今思っていることが10年後、20年後には違うこともあると思います。また他の立場の方からすると、そういうことはないとか、そうされたら自分は困るということもあると思います。ユニバーサルデザインの考え方の中で難しい部分で知られているのが、バリアフリー、誰かにとってのバリアフリーと誰かにとってのバリアフリーには、せめぎ合いがあるということです。お手洗いの話をしてきたので関連して話しますと、例えば男女共用トイレにしていこうという動きが社会的に注目されていますが、それは身体女性にとって大きな困難をもたらしてしまうのではないかと懸念されています。

世界的な動きですが、その一例です。高校のお手洗いが男女共用化された、その時に男子学生から女子学生への性的な嫌がらせが発生してしまった。女子

生徒の中にはこの性的な暴力や嫌がらせが嫌で、あるいは羞恥心をかきたてられるので、学校に行けなくなったり、お手洗いを使えなくなったというケースがある。ある面では、これが必要、妥当という思想もあるが、ある面では、それでは私は困る、僕は困るという考え方もあるわけです。

そうした中でどうやっていくのか、ユニバーサルデザインの考え方の中では、基本的にせめぎ合う要求がある中で、どう選択していくかということをサポートしよう、何かに統一するのではなく、選べるようにしようと考えられています。自由に選べるようになったとき、他の人にとって支障が出るのではないかと、いろいろなニーズに応じて社会もアップデートされなければならない。そうすると、次の問題が出てきて、じゃあどうしよう、と。これを繰り返しているのが私達の社会のあり方であったり、デザインの考え方であったりします。

ディズニー映画に「ズートピア」という作品があります。この映画が言っているメッセージは、“差別や偏見は良くない”という単純なものではありません。“誰にでも差別や偏見をしてしまうことはある、そういう価値観は持っている。そして加害者と被害者と見えたもの、強者と弱者と見えたもの、これは入れ替わり得る”というメッセージが示されています。それに気付いてアップデートして行くことが必要なのだと。自分は常に被害者だとか、自分は常に正義だというのではなく、思わず踏みつけてしまう人がいたり、自分のちょっとした言動が誰かにとっては差別だとか偏見になっているということがあり得る。それを自分自身、意識的に考えるようになっていこうというメッセージです。そうした中でバリアフリーって何だろうって思っていく、ユニバーサルデザインって何だろうって考えていくと、世の中には形だけのバリアフリーもあると感じるところです。

こちらは公園の入り口が改修されたケースです。元々ここには左側のスロープがありました。急なスロープではないが、バリアフリーの1/15勾配には足りないんですね。足りないところを補うということで横に新たにスロープが付けられたんです。新たに付けられたスロープ、あんまり役に立たないんです。幅がなくカクカクと短いスパンで回りますので、車椅子とか手押し車を使う人達にとっては、コーナリングが難しすぎて

全く使えないんです。ここは子ども達が遊ぶ場所になってしまい、この前の道を車が通るんでかえって危ない。バリアフリーを目指していこうという話だとなかなか簡単にはいかないという例だと思います。どう見ても役に立たないんです、でも基準に合ったらそれを作っちゃう、こういう考え方がよくないと思うんです。この場所にカスタマイズしようということでしたら、写真の右奥側には公園に入口がなく、そちらから来る人もいる、それでしたら例えばこのスロープはこちらまで伸ばして、横に階段なりを別途付けるなど、車いすなどを使わない他の人にとっても新たな価値を提供できるデザインに作り変えることはできたはずですがそれは選ばれなかった。なぜならこれで十分基準に合っているからです。そういった考え方ではなく、それぞれの場所に応じたカスタマイズの下で、本当にこの場所が必要とするものは何だろう、それを考えていくことが必要なんじゃないかということを思わせてくれる光景でした。

ユニバーサルデザインを考える基盤として、デザインされているものとは様々なアンコンシャスバイアスを含む思想のかたまりだというお話をしてきました。今お話すること、今良いとされるものもいずれ変わっていくとか、他の立場からするとそうではないこともあり得ると思います。また誰かのバリアフリーが他のバリアになる可能性、そこはどう調整しましょうとか、選択できるようにしましょうということも必要です。最後の例ですと、形だけのバリアフリーになってしまわないために、その場に応じた適切なカスタマイズが必要になってくると思います。

北海道大学が目指されているユニバーサルデザイン・キャンパス、こちらは目的ではなくて手段ですね。ダイバーシティとインクルージョン、これを目的として、キャンパスはどのようにユニバーサルデザインに配慮して作っていくか。社会は常に変化しますし、これからも変化していきます。そうした中で想定する人々にとって実現しているかを問い続ける姿勢が、ユニバーサルデザイン・キャンパスのあり方だと思います。成長し続けることが大事だというメッセージがございました。そういう意味で、“ユニバーサルデザイン・キャンパスがもう実現した”と過去形で話されることはないと思います。その時代その時代に応じた大学という場

所、北海道大学という場所、ならではの固有性をいかに追いつけることができるかが、最も大切と考えます。なぜ大学でやるのか、なぜ北海道大学かという固有性に関連した話が、次の「公共私の超越」という話題です。

パブリック「公」、コモン「共」、プライベート「私」、さらにその下に「個」インディビジュアルを置きます。これらは誰が使えるかということと、何ができるかという、利用者と行為のグラデーションの中に位置付けることができます。パブリックな空間では、公的な制度と管理のもとで運用されているスペースがあります。どのような人でも利用できるかわりに、利用する時間や内容は制限されます。インディビジュアル、最も個人的な場所です。そこは誰もが利用することはできません。特定の人しか使えません。その代わり何でもできます。例えばラフな服装で家でごろごろすることはここではできますけれど、公共の場ではその場所にふさわしい洋服を着るなり、その場所にふさわしい振る舞いが求められます。このようなグラデーションがある、多様である場所の選択肢にも繋がっていきます。先ほどの選べるのが大事ですよという事ですと、大学キャンパスの中でも個に根差して使うことができる場所、共に根差して使うことができる場所、というような場所のグラデーションがあることは、人々が自分は今こうしたい、あるいはこういう特性を持っている、こういうニーズを持っているのでこう過ごしたいという要望に対するサポートにつながります。

これらが遷移していくこと、移り変わっていくことは、そうしたさまざまな場所の可能性を増やしていく要素です。

想定する人々にとって、大学という場所ならではの固有性を考えるということは、大学って誰のための場所か、どうして、何が、どのように大学という場所で可能なのか考えていくことでもあります。場所の利用者と使い方はグラデーションの中で遷移していくと表現しましたが、そうした事例が世の中にはたくさんあります。例えばパブリック、公であるはずの公共の高齢者施設において、その場所を自分らしく使いこなすということ、そこで自分らしく生きられることが大切なんだと、その人らしい環境にカスタマイズしてほしいという考え方があります。パーソナライゼーションと言

います。パブリックからインディビジュアルへの遷移です。

あるいは公共空間をどのように個が使いこなすかも、例えば“公園の使いこなし”という言葉で注目されています。反対の方向もあります。個の空間である場所を私的な事業に開いていく、住み開きとか、私的な公民館という事例もありますけれども、事業所を地域に開いていくという考え方もあります。

従来はそれぞれに位置していたものを、違う使い方に遷移できないかという取り組みが各地で見られます。こうした変化は、場のあり方の多様性、利用者や行為の可能性を増やしていくと考えられます。従来そうでなかったものが作られていく意味で、はずれものもたらしていく新たな進化と表現できます。

こうした中で大学は、特に国公立の大学ですとパブリックの意味を持っていますし、公共空間の意味も持っている、こうしたところに位置づく空間だと思います。それらはしばしば、社会的資本と表現されます。誰のための場所で、そこでは何ができるという関係の中では、社会的な要請や価値観の中でせめぎ合いがあります。大学とはこういうものなのか、ここではそれはできないという限界が、一般的には共有されている。それを越えていくことに新たな価値が見出されると解釈することができます。それはダイバーシティとインクルージョンの最終目的が人間の社会がどのように良くなっていくかであるとか、技術や知識のアップデート、イノベーションがどのように実現できていくか、というところにあるのだという総長先生の話にも関連するものと思われる。技術や価値のオープンイノベーションを期待できる場所としての大学は、社会のための実験場と理解することができます。私は私立の大学に在籍していますが、私立の大学といった「私」にあたる事業所でも外に開いていくことによって、様々な価値を提供する、見出すことができる、相互の関係性を作り出すことができるという事例は各地で見ることができます。

例えば JOCA 大阪という事例をご紹介します。JICA、青年海外協力隊の OBOG を中心とする組織です。ここは古い文化住宅を改修して利用するオフィスですが、その1階をオフィス兼セルフサービスのカフェに運用されています。地域に古くからある建物の維持保全、ある種の文化の保持にも寄与するとともに、

地域の人々に居場所を提供している取り組みでもあります。みんなで作ったセルフサービスのカフェという看板がありますが、地域の方も巻き込んでDIYで作られています。「私」の事業所ですが、それらを開いていくことで、町の人たちのコモン、「共」の空間を実現している事例です。こうした自分たちならではの考え方の元に新たな場所を提供できるのではないかと、自分たちがコントロールの対象に置いている空間を、新たな価値を生み出す場として活用することができるか、という可能性を示してくれる事例だと思います。

自分たちが思想や利用者をコントロールしている空間を、私は「フィルタードスペース」と呼んでいます。フィルタードスペースは、テーマ型のスペースです。そこには運営者がいます、主（あるじ）とも言います。主が場のマネジメントをしたり、アレンジをしたり、プロデュースをしています。そこにはテーマがあり、それに共感する人々が集まっています。その主が開くや閉じる、誰に対して開く閉じる、どういう意識がある人たちに来てほしいか、そういうことをコントロールしています。先程のパブリックからインディビジュアルのグラデーションの中の、コモンのところがこの「フィルタードスペース」に当たると考えられます。パブリックはオープンなスペース、インディビジュアルな空間は一般的にはクローズドなスペースです。コミュニティを参照して言うとゲートッドコミュニティと呼ばれている。その中間にあるのがフィルタードスペースであり、そこに存在するのがテーマ型コミュニティと説明ができると思います。

大学というのはフィルタードスペースとして位置づけることができると考えますが、フィルタードスペースでは独自のルールを作ることができます。他と違っていいです。他ではできないことをやってもいいし、逆に他ではできてここではやめてくださいということもできます。主が介入する、主自身による運営によって他では難しいことを試すこともできます。例えば社会が目指そうとする共生や混在、インクルーシブな社会を目指すということはお題目で言われてますが、すぐに実践できるか、実現できるかという難しいところもあります。新たな取り組みを試す意味では、大学というフィルタードスペースは非常に良い場所と考えます。次の社会のあり方を模索する実験場としての価値

もありますし、大学は研究教育機関ですので、どこよりも先端的であってほしいと思います。社会の規範たる教導性のある場所であることが望ましい、そうだと嬉しいと思います。

多様性や変化のインキュベーターであるため、空間はどんな特徴があったらいいかというと、余白があること、共有される余地があること、開かれていることが大切です。開かれていることも、一方で部分的に閉じられていることも重要です。開かれと閉じられのバランスこそが、フィルターと説明できます。ユニバーサルデザインの中で話していますが、なるべく多くの人にとってアクセシブルであること。そのためにはキャンパスがクローズドな空間ではなく街の一部であって、街自身もキャンパスである。街性も共同的である、あるいは「共」、コモンの場所の性格を位置付けていくと思います。ユニバーサルデザインを考えるとというお話で触れた、選択ができることや調整ができること、多くの人にとっての当たり前を増やしていくデザインであること、ノーマライゼーションに根差したデザインであること、これらは大いに関係する、殆ど同じことを言っているとします。

こちらは、ニューヨークにありますニューヨーク大学のキャンパスです。キャンパスと大学の関係をテーマにした時に、よく参照される事例です。他に良く取り上げられる例にボローニャ大学などもあります。きっと小篠先生が突っ込んでくださると思います。ここはニューヨークのワシントンスクエアパークを中心に、様々な大学関連の施設が建っている、それが街と溶け込んで一体的に作られている、都市の中の大学です。こちらを訪問した時に卒業式が行われており、大学の広場ではない公園が、まるで大学の広場のように使われています。一方で、さまざまな町の人々がその日その日をくつろぐ場所として使われています。卒業式のお召し物を着ている方たちをおめでとくと見ている街の人がいますし、我関せずとして過ごしている方もいます。公園の周りにはニューヨーク大学の建物、大学関連の建物があるのですが、それは街となんら境界を持たず作られています。この大学のキャンパスが、どれぐらい街と連携しているかは、大学それぞれの立地や設立の経緯等と関連してくるものですから、こうでなければならぬということでは全くありません。

こういうあり方も違和感なく存在しているという事例です。ちなみに東京電機大学東京千住キャンパスは、神田時代からの伝統で、閉じられていない、オープンなスタイルです。

街に対してフィルターを作っていくのが大学の一種のありようという話、開かれと閉じられのバランスが難しいと痛感させられたのは、COVID-19 パンデミック下での本学のあり方でした。本学も周りと同様に空間を切っていないキャンパスです。街の人にも普段からお使いいただけるよう、コモンのスペースを提供しています。今はもう飲み屋も開いていますが、飲食店が営業していなかった期間は街に居場所がない人達が溜まってお酒を飲んだり、長時間滞在することがありました。これが近隣の街の方達から嫌がられて、街に開かれたオープンスペースとベンチが、無料と言いますか、嬉しくないデザインで閉じられてしまいました。開かれと閉じられのコントロール性を本学では考えてなかった。考えないでいい前提の下で作ってきたので、逆にこんな風になってしまいました。一旦閉じられたスペースは、今も再オープンはしていません。もしもある程度開かれ閉じられの調整ができるデザインを採用していたら、いい悪いは別の問題として、こうはなっていなかったと言えます。

もう一つ、こちらは大学の前にある交通広場に隣接している半屋外のスペースです。「新型コロナウイルス感染症防止のため、この施設の使用は禁止」と書いた看板が置かれています。書いてあるのですが、すぐ人がいます。禁止と書いたくらいで、利用を押しとどめることはできないという感じです。ここから学べることは、使用を禁止しますと言葉で書いても、使う人は使うので全く伝わらない。直接的に使えなくする方法、例えばこのベンチの上に邪魔するものを置いてあれば、そこをあえて使いはしないと思います。良し悪しではなく、無秩序は無秩序を生みます。誰かが座っていればそれに続く人たちが出てきます。しかし、もっと注目すべきは、街には滞留の場所が必要ということです。他の公園が閉鎖されていく中でここしか居場所がない人たちが逃げ込めます。ここにいらっしゃる方達は、本学の学生ではありません。大学が閉鎖されていた時ですから。つくづく、街には居場所が必要なのだと思います。これは夜の風景ですが、夜もい

る。閉鎖されていても夜もいる。施設の使用禁止ってカラーコーンとバーの内側が駄目なのかな、外ならいいと思われて、どなたかが座り始めて、そうすると他の人も座るようになる。どう開かれと閉じられをコントロールするか、開かれたキャンパスだと宣言するにはこういうことが難しいと実感しました。

このフィルタードスペースとしてのコモンというものを、大学キャンパスから一回離れて考えていきますと、そこは場のファシリテーターとなる主（あるじ）によって作られた場所です。ルールや運営者の思想への共感、利用にかかる料金などを主がコントロールできます。その是非は別として、それはこの場所に共感するのなら使っていいというメッセージにもなっています。どなたでもお使いくださいというメッセージなのか、あるいは人を選ぶようなメッセージなのかという違いが出てくることです。一方で、誰にでも開いていけばそれがいいのかというと、そうでもないところもあります。利用者が安心できるために、ある程度閉じられてないといけないという考え方もあります。先ほどの大学キャンパスのオープンスペースですけど、元々完全に開かれていたが故に、今は誰に対しても、学内関係者にも全部クローズになってしまいました。大学に研究等で許可を得てきている学生ですら、ここを使うことができなくなってしまった。本当に禁止したかったのは、街の人が自由に使うのではなく、こちらが提示するルール、酒は飲まないでくださいとか長時間座り込まないでくださいとか、ルールに合わない行為だけでした。それだけフィルターできれば良かったのですが、そういうことはできないので、0か1かで誰も使えなくなってしまいました。もしフィルタリングである程度閉じられていけば、この人達はいいですよという調整はできたはず。それもできなかった。そういう意味である程度開く、ある程度閉じるというバランスをどこに取るかは、狙っている利用者に優先順位を生じさせる。その対応の可能性を示すものであったと説明できます。ある程度閉じられている場所はそこに参加する人々と世界観や価値観を共有できる安心感にも繋がります。共有された価値観、私達はここを使うことができる。私達はこの場所に集まるんだという価値観によって強化される共同の空間、コミュニティと言いつけられます。「閉じられ」は、共通の価値観の要

素になると理解できます。

最後に、共生社会のお話しです。「共生社会」は私たちの日本でも、それから世界的にもキーワードになっている概念です。共生社会を考えていく時に、大学キャンパスが何ができるかですが、今日のお題である、ダイバーシティとインクルージブを体現する場所として、大学キャンパスはどうあるべきかが関係します。宣言のメッセージの中には、大学を構成するあらゆる人々にとってこの場所がふさわしくあるようにと書かれていました。そこで考えられているのは、基本的には“現在の構成員”だと思います。右にあります図、これは清水博先生の「卵理論」をイラストにしたものです。自己というものは器の中に割り入れられた卵のようなものであると説明されています。このうちの黄身が局在自己です。「自分」のコアのような部分です。器に応じて黄身の周りに存在する白身を、遍在自己と説明しています。それは「場」であって、「周囲との関係性」であると説明しています。器というのが場所です。ある場所（器）に自分が置かれて、その周りに場・関係性（白身）が存在します。この遍在自己、すなわち世界との関係をどのように取るかが、「自己」であると卵理論では説明しています。キャンパス・コミュニティにこれを置き換えたとき、大学という自己、大学というアイデンティティあるいはブランド、それが何かそのらしさをどう実現していくかを考えますと、その中の中心にいる人、黄身に当たるところですね、つまり学内の構成員だけではなく、周りの街とか人々との関係性、白身の部分まで「自己」だと考えるべきと説明できます。現在の構成員は局在自己ですけど、それに加えて遍在自己まで広げていく、学生や教職員が学内の構成員としますと、学外の構成員、関係を持ち得る人々、関わりうる外部の要素までをダイバーシティやインクルージブの対象として考えていくことが、自分自身を考えていくことに他ならない。そこでいう学外の構成員、関係を持ち得る人々として考えたいのが、“今ここにいない人”です。現在の構成員を大事にすることは原理原則です。一方で、今いない人は排除されているのではないかと、排除の要因が自分たちの考え方であったり、建物の作り方であったり、そういった要素にあるのではないかと、あるいはこんなところにはいられないと忌避されているのではな

いか、今いない人をいかに取り込むかが、必要だと考えられます。

ダイバーシティとインクルージョンの目的や効果とは何か、それは技術や知識のアップデートやイノベーションだと考えたとき、今はまだないものを作りたいわけです。そのために今いない人って大事なんじゃないか、今まだいられない人をどうやって取り込んでいくのか、今はまだ何ができていないのか、利用者と行為のグラデーションの中でどこを取り込んでいくと「自分」は拡大していくのか、アップデートできるのか、という考え方が一つの方策だと思っています。

こういう研究をしたことがあります。障害のある学生への配慮を各大学がどのようにしているか、という研究です。『障害学生のための大学案内』という雑誌がありまして、そこに各大学が自校での取り組みを回答しています。それらの統計を取りました。支援の内容として、まず受験時の配慮があります。在学中や就職での支援があります。支援の方法では機器による支援や、建築的設備による支援があります。さまざまな支援や支援の仕方を集計しました。そこで改めて分かったのですが、一連のストーリーとしての配慮が必要だということです。入試の時の受験の配慮から、就学に際しての配慮、例えば目が見えにくい方でしたらノートテイクどうするかとか、車椅子が必要な方でしたら教室に行くのはどうしたらいいとか、あるいは生活面でのサポートやフォローなどです。就職をしていく時のフォローまで、大学と関連する様々なものが、一連のストーリーとして配慮されていることが必要と分かります。それが実際にはどうできているかを調べたのが下の表です。受験の配慮、入口です。“ほぼ全ての障害に対する配慮が行われている”から、“障害を持つ方に対しては受験で特に配慮はしません”という大学まであります。在学中の支援として、ほとんどの支援が行われている、あらゆる支援と言ってもいいぐらい行われている大学から、支援はしませんという大学まであります。一番怖いのがここです。受験の配慮はする、視覚、聴覚、肢体障害ほぼ全ての障害に対する配慮をします。受験では配慮するけど、入ってからはほとんど支援しない。なかなか難しい状況です。

整備の状況でいうと、国公立の方が私立よりも一

般的に整備されています。国立大では合理的配慮が義務だからです。文系ありの方が理系のみの大学よりも整備が進んでいました。理系のみの場合、実験などがあることを理由に、難しいと断ってしまう大学が多いような、統計上の特性はありました。もちろん全部がそうだということではなく、大きな傾向ということです。エレベーター等の基本的な設備はほとんどの大学で対応済みでした。一方で、発達や知覚の特性などへの配慮はまだ課題があることが示されました。

先ほどの調査は5-6年前ですが、発達や知覚の特性の研究は、最近はどんどん進んできています。こちらは筑波大学ですが、アクセシブルスタディールームという取り組みを行っています。こちらも2021年7月に拡大して公開されたところですが、感覚過敏性のある方、聴覚や視覚の疲労のある方、オンライン授業が増えた経緯もあって、疲れを訴える方が増えたという事情もあった。学習困難などいろいろな感覚の特徴のある学生もいる。そういったことがよく見えるようになった。そこで、個別カスタマイズできる環境を一人用の学習スペースか、休憩室、共同の自習室で提供しているという取り組みです。障害のある学生が当事者として加わられて、教育の専門家の方、環境の専門家の方、特別支援の専門の先生たちと一緒にこういう場所を作って、使ってみて、使ってみると実際にはこうだという意見をもらって、アップデートしているそうです。

障害の認知が進んで、障害のある学生が増えていく見通しもありますし、今まで障害があることを理由に、望む大学に行けなかった、望む勉強ができなかったことは良くないだろうと、そうしたところに門戸を広めていった方がいいと考えられています。ところが私が先ほど示した研究を発表したら、国公立の大学は配慮が義務だからやるだろう、でも私立大学はあくまで私立大学なのだからそんなことまでしなくていいんじゃないか、と言われたんです。私立大学に課されているのは義務ではなく出来たらやってください、という努力義務までです、現在のところは。私はその先生に、そんなことを言って、お怪我した時にご自分が困りますよと言ったのですが、それから数年たって、私がアキレスを切りました。アキレス腱を切りまして、今のようZoomもなく、車椅子で大学に行っていました。

そうしたら私立大学なのに設備の配慮が必要かと言っていた先生が、ごめんね本当だね、誰もが怪我をする可能性がある。僕もあれからヒザを悪くしたから分かったけど、本当にそうだった、とおっしゃって、私の車椅子を押してくださいました。せっかくですからってことで街歩きをしまして、例えば大学の周りのお店に入ろうと思ったら入り口に階段がある、ここは狭くて通れない、いろいろ勉強させていただくことができました。

そこで分かったんです、目に見えると分かる、なるべくたくさんの当事者がそこにいる、場を共有する、それによって社会とか場がアップデートされる。先程、ちょっと危ないんじゃないかと、受験では配慮するけど入った後は配慮があまりないというような状況は大丈夫かなと言ったんですが、実は入って見た時に、まだ十分できるか分からないけど、とにかく入って来てみてくださいという、もしかしたら挑戦の大学だったかもしれません。そう考えると、いろいろな人とまず一緒にいることが大事とも考えられます。

今言われている「共生」は、相互のケアだと表現されます。ケアは医療人類学の分野では“共に在ること”が原理原則とされます。このケアというキーワードも注目されているワードの一つですが、先程話題とした、「壮年男性を前提にしてしまう社会」とは、経済的生産を重視し過ぎたせいだという表現がありました。経済的生産を社会的再生産より重視し過ぎる、だから、ケアが軽視されケアの外部化につながっている。今日、男性がケアを行わない立場であるということは、敷衍して権力や経済的強者の特権となってしまう。それはいけないんじゃないかと指摘されています。

自分が怪我をすることもあるという観点で見ますと、ケアがあるというのはむしろ当たり前のこと、ケアを行わない場所は他の場所にそれを外部化した特権的な場所ではないかと表現できます。キャンパスにケアが足りないとしたら、それはケアを他の場所に押し付けてきたのではないかとということです。

コロナの間でいろいろな気付きがありました。リモートワークやリモート学習では場面の転換ができない、自然発生的な偶発的な発展的な交流の機会がなくなった、ノンバーバルコミュニケーションが失われてしまったなどです。私はこの講演中も意識して手を動かしているのですが、目を見て話すとか、聴衆の反応を

見ながら適切に言葉をカスタマイズするとか、そういうことが難しくなりました。学生たちからすると、そういういったノンバーバルなケアを受け取れなくなったのだと感じています。学生同士でも無意識のレベルでの学び合い、インフォーマルなケアがなくなってしまった。

この右の研究は、実家暮らしと一人暮らしの方で、コロナの外出自粛があった時にストレスの変化がどうなったかを調べたものです。交流や場面の転換や、ハイスpek的な設備を使えてた人たちは、外出自粛が長期化する中で慣れてくる。十分やっているとなくなっていく。それらに恵まれなかった一人暮らしの方、高いストレスを持った人は、ずっと高いストレスを持ったまま緩和されませんでした。気にしない人はずっと気にしない、しかしそうでない人はストレスと適応しながら生きていくことが難しくなると分かりました。

もう一つ、分けるから差異が生まれるところなんです。私たちの大学は学籍番号を奇数と偶数にグループを分け、半分ずつの登校を約一年間やってきました。何が起こったかという、成績に差が付きました。特に実習系の科目でどちらかのグループの成績が上がって、どちらかのグループは相対的に下がりました。他学科でも同じことが起きました。そんなことが起こるとは思っていなかったので、びっくりしました。想像するに、どちらかに元気な人が何人かいて、その人達の相互のケア、刺激がうまくいって、こちらのグループはうまく行った。こちらにはたまたまそういう機会に恵まれなかったということでしょうか。違いがあるから分かれるのだと思っていました。例えば学生さん達の仲間意識としても、学科の勉強を頑張っている人達とそれ以外にも興味がある人達など、元々意識興味が違うから分かれていると思っていました。しかしそうではなかった。「分ける」から「違いが生まれる」ことがよく分かりました。混ぜてしまうといろいろなトラブルになることも懸念されるんですが、元々混ぜてるという原理原則に立ち返ると、分けてトラブル防止というのは逆におかしい。多様であったり共在していることが大事だと言っていますが、それがむしろ当たり前ののだと。そこが多様でないとか何かに特化することは、他の場所に自分達が排除しているものを押し付けたり、外部化してきたということで、それは特権的な場所とすることができます。

私達が作りたいのは新しいイノベーション、当たり前なのですが、ではそれは何か。それは“ただ居ることができる”だと思っています。例えば学生という形でなくてもいい。キャンパスにさまざまな人がいる姿そのものが、ダイバーシティであるとか共在に繋がっていくのかなと思っています。障害のある人の中にはさまざまな能力を持つ人もいます。だからそうした人を発掘しようということをよく言います。それがいいことだとしています。いろいろな人に活躍の機会を与えよう。それはそれで嬉しいですけど、別に誰もが活躍しなくてもいいです。何か突出した能力がなくっていいです。ただただそこに居る。居るのが当たり前、そこから始められないのかということが、例えば、街のさまざまな広場の風景に見ることができます。

ニューヨーク大学の前にあるワシントンスクエアパーク、ご覧いただきました。例えば、日本でもいろいろな属性の人がただ居ることができることを目指した公園作りも進んでいます。こちら別の公園で、ブライアントパークですが、いろいろな人がそれぞれの居方をできるように、基本的なバリアフリー対応もしています。場所に選択性があることも大切にしています。芝生の床に座り込むとか椅子に座られるところ、場所の選択肢があったり、そこでの行為に選択肢があるように、本を置いていたり、多様なプログラムなども提供されています。このハードやソフトの誘因の要素があること。そこが否定されない場所であることが大切だと思います。元々いろいろな人がいる場所では多様性も可能性も目に見えます。自分がここにいていいのかを考えなくて済みます。元々いろいろな人がいる場所って、誰も否定しないんです。話はいろいろと展開しましたが、広い意味での福祉とかケアといった意味での地域資源のあり方、ただ居ることができる居場所とそれが実現するコモンのあり方、そのコモンが作ってくる偶然の出会いとかインフォーマルなケア、例えば開くと閉じるのバランス、フィルターという空間の膜によって実現するのではないか、それがもたらしてくる共生の場を新たな教育文化とか、北大ならではの文化と考えることができるのではないのでしょうか。

今日の話は、必ずしもキャンパスの専門家ではない立場からユニバーサルデザインの話、公共私の超越のこと、フィルタードスペースとしてのキャンパスの

こと、共生社会の基盤としてのキャンパスのあり方、いろいろな話をしました。ユニバーサルデザインからは始めるというワードと、ただ居ることができるからはじめる、ここがぐるっと回って新しい当たり前「ただ居ることができる」からはじめる共生社会の基盤となるキャンパスデザイン、そこで実現してくるユニバーサルデザイン実現に向けて進化し続けるキャンパスのあり方に繋がってくると思っています。私の話は以上になります、ありがとうございました。

菅原 山田先生ありがとうございました。これからは小篠先生にもお入りいただき、お二人による対談をお願いしてよろしいでしょうか。よろしく申し上げます。

小篠 それでは聞き手という形で入らせていただきます。山田先生のお話が非常に多岐に及んでいる、非常に密接に絡み合ったことをいろいろ言っているの、カチッと整理することがなかなかしにくい、本日お聞きになっているみなさんも分かった部分もあるけど、理解しにくい部分もあったと感じていると思っていますので、その辺をもう少し紐解けるといかなと思ひ、お話をさせていただきます。よろしく申し上げます。

ユニバーサルデザイン・キャンパスを作ろうとした時に、何を作るべきなのかという話から始めないと、作るべきものが定まらない、どう作るか決められない、そういうお話だったと思います。山田先生と私と他の研究グループの方々と一緒に、イタリアの調査をしました。その時にデザインという外来語がイタリアで使われ出す前に、イタリアで使っていたデザインという意味を持つ言葉、「プロジェクトツィオーネ」は、何を作るべきなのか、どうしてそれを行うべきなのかということを含めて言い表していることを、インタビューした方々から教えていただきました。それこそ、デザインとはそこから考えるのだということなのですね。とにかくそのことをいろいろな方々に言われたのを覚えてらっしゃると思うんですけど、これを今日本の社会の中で実践するのはすごく難しい状況にあるのもご存じですよ。

北千住の東京電機大学のキャンパスは、日本の著名な建築家の槇文彦先生が設計をされ、校舎ができていった訳ですけど、そのように新しいキャンパス

を整備する時には、みんなで使う公共的な空間に重点を置いて作っていくことは当然可能なのだと思いますが、北大のキャンパスみたいに古い建物から新築の建物まで混在している既存キャンパスで、何をどうすべきか決めていく、まさに街づくりと同じような方法で計画していかなければいけないわけだと思います。都市も既存のキャンパスと同様に様々な要素が同時に存在していて、そのような中で、徐々に改善をしながら整備をするという方法しかないように思うのです。そこには、ケースバイケースの課題もあり、決まった手法があるわけではないと思うんですけど、既存キャンパスである北海道大学に対してヒントになるようにもう少し踏み込んだ形で話して頂けませんか。

山田 質問ありがとうございます。共用の場を重視しながらキャンパスをデザインすることが、いっぺんに作るのであれば可能だろうが、既存の場合はどうかということについて。例えば既存の建物の中でも、ある部屋はこう使っていいとしていくアプローチもできます。建物自体、あるいは広場自体にどういう性格を与えようかということだけではなく、部屋一室からでも始められることはあると思います。キャンパスの中でというと難しいところもあると思いますが、例えば集合住宅ですと、空き家になった一室を使って、コミュニティの場所、コモンに供される場所を作る事例はあります。今日は、“ではない観点”のお話をテーマにしていますので、キャンパスの作り方としての事例を探すというより、他の建築類型とか施設ではこんなことができています。なぜキャンパスではできないのかという考え方が、他のやり方を参考にすればできると思えることがあるかなと思います。建物が新しくなくても場所が新しくなくても、使い方が新しければ、それは今ないもの、今ない場ということができます。場所としては古いけど、使われ方、そこでの活動の内容、どういう人を巻き込んでくるか、こういうことには新たな挑戦はできるかなと思っています。北大のキャンパスマスタープランを拝見したんですけれども、その中で印象的な記述と、フロンティア精神を大事にとか、トータルな一連の話を考えていくというものがありました。非常に共感するところで、それが大事だと思います。一個一個の取り組みが単発でもあり得るし、単発を繋ぎ直してい

くと何が見えるのという、数珠繋ぎのデザイン、トータルデザインによるクオリティオブライフの向上にこのことは盛り込まれてると考えました。いかがでしょうか。

小篠 ありがとうございます。すごい勉強されていてびっくりしました。まさにキャンパス以外の分野、建築や都市でやられているさまざまな方法論とか手法を、キャンパスの中に援用していく、そういうことは大変大事なことですね。特にダイバーシティとかインクルージョンっていうのは、キャンパスの中で言われ始めた話というより、そちらの方が進んでるし、問題が深刻であるし、発生していることもあるわけで、そのこのアイデアをどうやって大学に持ってくるのかですね。これも関係することかと思いますが、キャンパスの空間整備の中ではなかなかできていないことがあります。それは、ただ居ることができる場所を作るということです。この居場所があることは大事であるというのは建築計画の中、都市計画の中でずっと言われ続けています。しかし、それを実現するために、単純にハードの空間を作るのではなく、どういう活動が必要なのかを考えて、そのような活動を引き起こす場、プレイスを作るというプレイスメイキングが重要だと山田先生はおっしゃられたのだと思います。見せていただいた事例のブライアントパークとか、ワシントンスクエアもみんなそうだと思うんですけど、プレイスメイキングをやってるんですよね。もともと空間に与えられていた機能だけでなく、どういう行動や活動をそこでやれるようにするかが大事で、ブライアントパークなんか特に元はちょっと危ない公園だった。薬の売人ばっかりいて犯罪の温床だった。そこをどうやってみんなが使える公共の場に戻すことができるかという中で、様々な社会実験やエリアマネジメントしていく人たちが生まれてきた。ニューヨークでやってるパブリックスペースの再生は、このようなプロセスや方法論を用いて行われているところがあります。ユニバーサルデザインと言ったとき、プレイスメイキングが大事になってくると思っているんですが、これをキャンパスに応用すると、例えばどういうことができそうでしょうか。

山田 そうですねありがとうございます。ユニバーサルデザインとプレイスメイキングをキャンパスに応用し

ていく時に、他の場所と違う特徴も生かしていくとすると、想定する人が多様でありながら、ある程度想定ができるのは大学の特徴だと思います。例えば学生という姿が見えています。街の人という姿がある程度見えています。完全にパブリックの空間、不特定多数を相手にする駅や公園やデパート、そういったところではなく、大学というキャンパスに共感する人が来てくれていることが大きな特徴だと思います。そこにはプレイスメイキングのセッティングとして、大きなアドバンテージがあると言えます。プレイスメイキングで何を実現するのか、どう実現するのか、まずある程度価値観が共有されていることが大前提になるところがある。そういったところで大きなアドバンテージがある。

逆にディスアドバンテージがあるとすると、そこにまだいない人への目が向きにくくなることだと思います。非常に逆説的な話ですが、大学には入学する時に入学試験を通ることが必要で、アドミッションポリシーに合う方を入れる、学力が一定以上の方を入れるという選別をしています。そこに示されている指標ではない活躍をしているとか、活動をしているとか、生き方をしているとか、そういう方が入りにくいことに対する自覚が、キャンパス全体のアップデートには必要なのかなと思っております。もちろん各大学が卒業生だけではなく、あるいは関係してる人だけではなく、世の中にはこんな生き方もあるとうことを示せる人を呼んできたりとか、環境を作ったりとかいった取り組みも見聞きするところなので、「えっその人と絡むの」という驚きはあまりないと思うんです。まとめると、プレイスメイキングはそもそもしやすいんじゃないか、それはコミュニティがフィルタードされて、ある程度作られているから。それをアップデートするには外側をいかに取り込むかに対する、あるいはフィルターを作って閉じこもっていることに対する自意識が必要なのかなって思います。

小篠 そうですね、発表の中でもアンビバレンツの話をしてきたのがフィルタードスペースのところだったと思うんですけど、フィルタードスペースの話とCOVID-19の話です。起きてしまったことに対するせめぎ合いがあった。例えば都市側で言うと景観条例を作りましょうとか地区計画を作りましょうといった

時に、共通の価値観をどうやって作っていくかが大事であると前から言われていますし、建築計画の中でも例えば参加型のデザインをやりようとした時には、共通な価値観をどう作るかが大事になってくる。それがキャンパスだとやりやすいところは確かにありますよね。しかし、キャンパスの中だけで閉じていってしまうということが、ユニバーサルデザインという視点で広げて見ていくと、一つの価値観だけに収斂してしまうという危険性がある。それを防ぐために、広く外側の価値観を入れようとするとき、どういう開き方とか、どういう取り込み方とか結構悩ましいという話を言っていた。

それで、キャンパスマスタープランに関していえば、キャンパスマスタープランというのは合意形成の一つの手段と言ってもいいかもしれませんが、北大が大事にしている四つのポリシーを据えながらマスタープランを位置づけていくことは、この四つの話だったら皆さん納得していただけるというのがあったのでそういうやり方をしているわけです。

ちょっと聞きたいのは、北大のキャンパスの特徴が、容積率が40%ぐらい、建ぺい率で15%ぐらいでして、周辺の市街地と比較すると大変低い数値なのです。このような数値になる理由は、キャンパスの中には、建物が建っていないオープンスペースが一般市街地より多くあるからなのですが、そのオープンスペースを140年近く守ってきているので、今や札幌市の社会資本として位置付けられていると理解してもよいと思います。その特徴をユニバーサルデザイン・キャンパスにどう生かしたらいいかというアイデアをご示唆いただけると嬉しいです。

山田 ありがとうございます。東京電機大学の東京千住キャンパスも、キャンパスの周りはずっと駅前古い市街地で、公園がたくさんないとか、保育園も足りないなど、地域で子どもたちをどう育てていくかについて課題がありました。先ほどご覧いただいたオープンスペースの半屋外の空間、ああいった町の居場所も全くありませんでした。キャンパスができたことによって、先程のカフェのようなところことができました。あのカフェは学生がほとんどいなくて地域の高齢の方が溜まる場所になっているのですが、そうした新たな価値を

提供することができたと思っています。周りにある園庭のない共同保育所、小さい保育所の子どもたちが、大学キャンパスの中で遊ぶようになり、そういう様子が見えて、こういうことが街に必要、これいってなったことで、後に5号館を作った時に保育所を誘致しました。教職員でご利用の方もいますし地域の方のお子さんもいます。子どもがキャンパスの中で普段から遊んでいる、砂利敷きのところで砂利を投げて遊んだり、草を摘んだり花を摘んだり、自由でいいなって見てるんですけど、そういう風景を見てると、大学の中心的構成員って学生や教職員だと思いますが、それ以外にも、普通にいろいろな人がいるなと思います。先程の公園ですけど、子育て中の方が普通にいる。高齢の方が座っている。当たり前なんです。キャンパスが開かれている、あるいは北大のように広大なスペースがあって、そこにいろいろな人がいちゃう、そういった姿、風景は学生達やそこを訪れる人たちにとってとても刺激的と言いますか、そうだよ、大学って通ってなくたって興味を持って来てもいいし、勉強に興味がなくても勉強している人達がいる風景が好きで来てもいい。いろいろな人たちが普通にいることが体現されている空間なのではないかと感じます。そうした意味で電大キャンパスもトラブルというか、コロナ禍でうまくいっていないところもあると先ほど話しましたが、普段の状況で言いますと、子どもをどこか見えないところに囲い込むとか、街には存在しないものだと建築が言っていないということが大事だと思ってます。

北大も、個人的に好きなのは観光客が来る場所です。地域の人もそうですけど、ビジターが来る名所になるんですよね。関係人口とか交流人口が増えていくこと、地域のシビックプライドの中心として地域の外の人が入ってくる、それは大事なことだと思います。街の人にとって、外の人からすると街の人がホストなので、自分が北大の人達じゃなくても外から観光客が来たら北大っていいところだと紹介する、どちらかと言うとホスト側になれる。それは北大を含む街というものを地域の人が自分のものとして認識するきっかけになっているからです。観光客が来る、外の目があると周辺の人を中心に寄せてくる要因になるといいと思っています。

小篠 事象として出来事として今言われたことは起きると思うのですが、中にいる大学関係者だけの意見ではなく、外の力を使って大学のキャンパスをより魅力化していこうって発想は今まであんまりなかったんでしょうね。だから街とキャンパスを連続化していくとか、関係を持ちながら共生の状態を作ることや、山田先生がおっしゃられてることが実はできてなかったという反省もあるかなと思います。

これは私見なんですけど、夏に東京オリンピックのマラソンコースになりました。コースになったおかげでキャンパスの南門の外側の不法駐輪の山が一掃されることになって、全世界にその辺りで繰り広げられたレースのデッドヒートの映像が流された。長年課題だったところが、そういう外側から視線でキャンパスへの魅力や共感が高まったことは非常に意味のあることだと思っています。たいへん暑い日でしたけどキャンパスの中に中継車が入ってきた瞬間に、緑陰が広がって気持ち良く走ってそうに見える。それはキャンパスが持ち続けてきたオープンスペースの力であると思います。これはキャンパスというものを研究対象にしているからかもしれませんが、市街地とは全然違う環境を走っているんだという印象を全世界の人たちに与え、それが共有の感覚を持たせ、キャンパスに対する共有の価値を札幌だけでなく、全世界の人々と共有できるとすれば、それは大変大事だったんじゃないかなと感じました。

時間がそろそろかなという事で最後の質問というかご意見を伺いたいですけど、稲垣先生の本を引用しながら、今とは違うここにはないもの、今主流でないものが次を作るって言葉が使われて、この言葉を聞いたとき、山口昌男先生とか今福龍太先生とか、文化人類学者の人たちが言ってる、中心と周縁の話とか、クレオール主義とか、越境していくとかそういうキーワードが頭の中によぎったんですけど、パブリックからインディビジュアルに行く、グラデーショナルな方向の話がされたのは、まさにその越境していくことですよ。しかし、越境していくことは建築計画では非常に難しいことじゃないですか、施設作りでいうと難しい状況にあるけども、ユニバーサルデザインはそれが目指されるべきだと思っていて、今日北大の関係者の方々がたくさん見ていると思うので、強烈なメッセージで

言っていただけると嬉しいです。

山田 ありがとうございます。そうですね小篠先生がおっしゃった通り、越境することが建築計画的には法律のことも関連して非常に難しいところになっています、いました。それを変えていく大きな方向が、いわゆる施設と呼ばれていたものの解体だと思っています。施設と呼ばれていたものは、ハードとソフトの対応関係を指してパッケージされたものを指して施設と呼んできたのですが、それが変わってきたと、このところ20年の研究活動で感じています。例えば高齢者施設の中でも、特別養護老人ホームが従来の高齢者施設のあり方です。そこでは建物がこうでなければならぬ、運営はこうではならぬ、パッケージされていました。そのパッケージが解体されて、例えば民家を少し改修してグループホームという運営ができます。小規模多機能型居宅介護という運営ができます。という風に、建物と事業、あるいは事業とその事業を可能とする拠点、という風に分離することによって、組み合わせの可能性がたくさん増えてきたと感じています。学校とか大学教育という仕組みは、キャンパスでやらなければならないか、物理的なキャンパスでやらなければならないかが、変わってきてるところもあると思います。今私は残念ながら東京にいて北大キャンパスでのジギスカンパーティーに参加できませんが、それはそれで一つの可能性だと思います。物理的なキャンパスには偶然の出会いといった大きな可能性がありますし、価値があります。インフォーマルなケアが実現するには対面の場所があることは本当に大きなことです。でも、それに縛られないあり方というものもあると思います。建築計画が進化していく時には、建築以外の技術だとか価値観だとか社会情勢だとか、そうしたものの後押しであったり、今の社会情勢に強制されてる部分もありますが、そういったことが出てくると感じています。少子高齢化の問題とか、コロナで外に出られない、遠くに行けないことも問題となりましたけど、そうしたことが社会的な圧力、必要性を生んで新たな越境フェーズの転換、こういうものを作っているのかなと思っています。公共空間のパーソナライゼーション、今はそれが見出されたので言葉にできますし、絵にできますが、概念として存在していなかった時は

やっていいものだとも、やるべきだったと誰も思ってませんでした。概念が新たに作られることによって、そういうことが可能なんだとか、有効なんだとか、そのためには建物をどうする、制度をどうするという風に変わってくる。そういうことだと思います。例えば高齢者施設の制度が大きく変わった20年を見ていて思うところです。自分の大学も変わらなきゃいけないと思っています。

菅原 どうもありがとうございます。まだまだ話を伺いたいところですけど、時間も経過していますので、このあたりで対談は終了にさせていただきます、ご視聴の皆様から現時点でも10を超える質問をいただいております、全部は無理ですのでいくつか選ばさせていただきます、こちらの方で読み上げますので先生方の方で答え等お願いできればありがたいと思います。

一つ目ですが、ユニバーサルデザインを志向する時は短期、中期、持続可能性やバックキャストिंगといった時間軸の発想も必要でしょうか、という質問です。よろしく申し上げます。山田先生申し上げます。

山田 ありがとうございます。おっしゃる通りで、ユニバーサルデザインを考えるという時に、今いる人が何に困っているかを考えるというのは、基本的にはバリアフリーの考え方だと思います。ユニバーサルデザインの考えの原理原則で言えば、まだそこにいない人、これからいうかもしれない人達をどう想定するか、予め考えるというバックキャストिंगを原理原則にしていると思います。一方の持続性で難しいのは、社会が大きく変わっていく中で、今いいなと思ったものが違ってくること、あるいは変化しなければいけないことを変えられなくなってしまうことです。サイン計画で言いますと、例えば赤は女性のマーク、青は男性のマークという価値観が浸透してしまうと、それを変えることが難しくなってしまう。長きに渡って使われ続けるであろう持続性を大事にし過ぎてしまうと、社会の変化に対して本当の持続性とはアップデートし続ける価値観だと思うのですが、それが阻害されてしまう可能性があります。そのことを私たちは気にしなきゃいけないのではないかと思います。

小篠 モノのデザインじゃないことですよ、サステイナブルっていかユニバーサルデザインってモノのデザインじゃないので、見えないことをデザインすることもあるって事ですよ。見えないことは制度だったりシステムだったりそういったことも含めて考えざるを得ない。

山田 デザインが思想に与える影響に対する意識とも言い換えられると思います。

菅原 ありがとうございます。次の質問、北海道大学もキャンパスには多くの子どもや市民がいますが、それが大学の目的、価値観を損ねかねないことにもなると思います。例えば北海道大学では紅葉シーズンにイチョウ並木に観光客が殺到し、車道に出る人がおり、交通の邪魔になったり、主な利用者である学生が利用しづらい状況になることもあります。先生の開くと閉じるのバランスの観点から話を伺いたいとの事です。よろしく願いいたします。

山田 ありがとうございます。先ほどのうちの大学でオープンスペースが使えなくなったことと似てるところがあるかなと思います。一方の話が主な利用者である学生達が困るという考え方に対して、例えば小学校や中学校でも校庭解放という考え方があります。学校の主たる利用者は子ども達であって、その子達が使っていない時間に外に開いてもいいという考え方です。誰かが所有占有していてその部分を提供する。一方の、例えば北欧で子ども施設を見学に行きますと、オープンな空間の中に子ども達が専用で使える時間を作っていますと説明されます。学校とか教育施設は公共財であって、ある時間ある用途に関して優先順位が設定されますという考え方です。この場合は、「開く」のではありません。元々みんなのものがある特定の目的のもとで占有することを許可する、全然違う考え方があり得るのを見学に行って知ることができました。

北大のキャンパスは学内の中心的な構成員が優先的に使う空間だと思いますけれども、広い意味では公共財であって、優先順位が皆さんにあると解釈もできるのかなというところです。勿論交通的に危なくなってしまうということであれば、フィルターの話ですと些細な話で

すけど、入場規制している公園があるようにフィルターを作らなきゃいけないのかなという風にも思いますが、そもそもの考え方が違う可能性があることに対しては少し言及したかったです。

小篠 フィルタードスペースの話をした時に主の存在の話がされました。主というマネージャーがどういう考え方をユーザに伝えていくかが、イチョウ並木で人がごった返す、あるいは北千住キャンパスで夜ずっと飲んでる人がいる、というのに繋がっていくんじゃないかと思います。ここはこういうことをやる場所で作られているし、こうやって守ってきたから、こういう協力をしてください、見てもいいけど居てもいいけど、その居方とか見方はこういう配慮をしてください、っていうその伝達がほぼ皆無な状態が問題なんじゃないかなと聞いていて思いました。

菅原 どうもありがとうございます。非常に身近なご質問とお答えありがとうございます。時間の都合で最後の質問です。北海道大学には古河記念講堂などの登録文化財が何棟もあり、老朽化が進んでいます。耐震補強も喫緊の課題ですが、障害者のためにはスロープやエレベーターなどの設備追加も必要に思えます。が、美観を損なう恐れがあります。また膨大な費用がかかるのも課題です。古河記念講堂をどのように保全すべきでしょう。アドバイスをください。現場の北大にとって非常に悩ましい課題だと思います。よろしく願いします。

山田 ありがとうございます。改修の話でよろしいですか。費用がかかることは難しいところもあると思いますけれども、一つには今は建築の中でも歴史的な建物をどのように使い継いでいくかが話題になっています。使いながら保存とか、動態保存と言われていいます。元々の目的では維持できなくなった古民家を、福祉の用途で転用する、高齢者の事業所にしたり子どもの事業所にしたり、こうした今までの用途では使えないけれど新たに社会的な要請を持っている事業に使い変えていくことによって、その建物を維持保全していくための費用をある程度賄うことができるという考え方です。そこが美術的な価値だとか歴史的な価値という

ことだけでオープンにするのではなく、そこを使って何ができるかという考え方、そうした費用の賄いが、一つの話です。

もう一つ、スロープ等が必要になってくるとき、美観景観との兼ね合いをどうするかという話です。日本ですと古民家を見ていると何度も何度もいろいろな改修が加えられてきたのはよくあることです。お寺などもそうですが、歴史的な価値を大事にしているので、ある特定の時代に作られたものとして尊重したいという話の一つ、その時代で生きている建物として使い継いでいくのであれば、手が入らないことには無理という考え方も一つあります。そのバランスの問題で例えば正面の景観は残していきたいので、そこはそのままある程度バリアがあってもしょうがないとする。そして、サイドや裏、別のところからアプローチできる動線等を作り、現代的なニーズとのマッチングを図っていく改修も事例としてあります。古河記念講堂の保全の話、小篠先生がお詳しいと思いますけど、一般論として話させていただきました。

小篠 全体的に言えると思うんですけど、歴史的建造物に対しての評価をどう考えるか、という評価方法が北大の中でカチツとしてない状態が課題として古河講堂の利活用のところにあると思います。質問者は北大の方だと思うので北海道札幌は詳しいと思うので一つお話しすれば、山田先生がおっしゃられた利活用の方で、お金の話はちょっと置いて、重文になっている豊平館があります。中島公園にある豊平館も結婚式場で使えたり、いろいろなレセプションで使えたり、そういう用途で使おうとしていたけど、耐震改修をしなきゃいけないこともあり、この際、バリアフリーにも配慮してってということで、後ろ側に全く別棟で新しい上下階移動できるエレベーターなどを設置した棟を作って接続する改修方法を取りました。例えばそういうやり方もある。手法はいろいろ考えられると思うんですけど、この建物をどう評価するか、何を評価してどう使っていかの議論をしなきゃいけないんじゃないかと思っていて、まさにプロジェッタツィオーネで何をすべきなのか、何を作るべきなのか、どう使うべきなのかという継続的な議論の場が必要なのではないかと思います。古河講堂は非常に大きな財産なので、こ

れを壊すってことはないだろうと前提としながらの話です。

菅原 ありがとうございます。北大にとって象徴的な建造物ですので、今後より議論を深めてどう対応していくか対処していくかという話だったと思います。時間の都合上ご紹介できなかった皆様には大変申し訳ないのですが、ここで質問を終わらせていただきます。両先生お答えいただきどうもありがとうございました。

最後になりますが私の方から一言、本日の記念講演会を拝聴いたしまして、あらためて「北海道大学ダイバーシティ&インクルージョン推進宣言」を読み返しますと、「北海道大学は、誰一人取り残さず、すべての構成員の尊厳が守られ、ひとりひとりが誇りを持ち、互いを尊重する大学環境を目指します。」とあります。この宣言を、北海道大学のキャンパスで実現していく上で、本日の「共生社会の基盤となるキャンパス・コミュニティ」のご講演、ご対談、得るところがたくさんのご時間ありがとうございました。既存にとらわれない柔軟な発想が選べることの大切さであったり、新しい社会のための実験場、局在自己、遍在自己と言ったキーワードが印象に残ってます。そしてアキレス腱損傷の方にも優しいキャンパス、これを目指さなければいけないということも心に強く残っているところです。

本日のお話がこれからの北海道大学のキャンパスの中でどのように実現されていくか、どうしたら実現できるのか、私達は改めて考えていきたいと思います。そしてそれを「光」は「北」から、「北」から「世界」へ発信し、取り組み続けていくことを結びの一言とさせていただきます。本日の講演会「大学とユニバーサルキャンパスデザイン」を終了させていただきます。山田先生、小篠先生、ご視聴いただいた多くの皆様、誠にありがとうございました。